
バカと兄と召喚獣

ASTEL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと兄と召喚獣

【NZコード】

N6869X

【作者名】

ASTEL

【あらすじ】

バカと普通と召喚獣の主人公の弟日高大貴。彼がなぜ存在するのか。原作崩壊の山を築くため（？）にはじめさせていただきました。プロローグ編にのみ、ああつ女神さまつの登場人物が出てきます。

プロローグ

ただ白い空間が広がるだけの場所、上も下も右も左もわからず立つてるという感覚すらない

誰だつてこんな空間に放り出されたら、どう感じるだろ？・・・

僕「現状確認、僕の名前は日高大貴、16歳、男、好きな漫画はあ
あつ女神さま、好きなラノベはバカとテストと召喚獣、好きなアニ
メはガンダムシリーズ・・・」

? ? ? 「あら気づかれました？」

僕
ー
えーとあなたは?

？？？「一級紳」種非限定女神のベルダンディーと申します。」

僕
—
・
・
・
・
・
・
・
・
・
え?
」

マジ? まさか本当に会えるとは

僕、えーと誰に教わったのですか?」

ベルダンティーニ「はい、それはもう?」

何かがおかしい？

僕「で、僕はどうなったのですか？」

ベルダンディー「実は妹のスクルドがバグを消去する際に間違つてあなたに関する記述を消してしまったのです。」

僕「は？」

ベルダンディー「それであなたをもとの世界に戻すことができなくなつてしまつたのでどうしようか一緒に考えようと思いまして・・・」

「そーですか。まさかスクルドになえ・・・

ではそうですねえ

僕「とりあえずスクルドさんをあまり責めないであげてください。行動にミスはつきものです。できれば処分もしないでくれるとうれしいです」

ベルダンディー「ほんとうですか！？」

僕「そのかわり彼女に機械の作り方を教えていただきたいのですが・・・ディメンション³（三次元世界 要するに我々にとっての現実世界）作られているものをたいていは作れるくらいに」

ベルダンディー「わかりました。妹に伝えておきます。」

僕「次に僕をバカとテストと召喚獣の世界に転生させてください。

能力をいくつかつけて。」

ベルダンディー「能力ですか？」

僕「とりあえず逃げ足を速くしてください。あと会話している相手の考えていることが聞こえる能力。そして完全記憶能力を、あと今までの記憶を消さないでください」

ベルダンディー「すいません完全記憶能力はちょっとできないかもしません。」

僕「代わりにプログラミング能力は付けられますか？」

ベルダンディー「それなら大丈夫だと思います。」

僕「ではそれでお願いします。」

ベルダンディー「では一月ほどスクルドにならってから転生していただきます。このたびは本当にご迷惑をおかけしました。」

僕「お気になさらず。」

第一問

そんなわけで僕は一月天上界で暮らすことになった。

スクルドから僕ら人が考え付かないような機械の作り方を教えてもらつたり

ウルドに変な薬の実験台にされたり

そんな調子で日は流れ天上界に滞在する最終日

事件は起こった

ウルドに勧められた酒を飲んだ後なぜだか宴会が始まり小さな丸い
物体を飲み込んだ後

気を失つた

翌朝

田を覚ますとベルダンティーとウルド、スクルドが、心配そうな顔でこじらを見ていた。

なんでも酒乱の最中に誤つて僕が天使の卵を飲み込んでしまったらしい

神様が

「ハーブのハースだから守護天使としてつけてやつてはビツか」

とおっしゃられたそうなので名前を付けてから送り出すことになつたそつだ

至れり勿べせりで申し訳なくなつてきた・・・

天使を出してみると暖かな光のイメージを送ってきた

そこで正義の光と名付けることにした

ちなみに光の法術を使えるらしいがむやみやたらと使ってはいけないとベルダンディーからきつく言われた

その名の通り正義にのみ使うと心に固く誓つた

そして僕は天上界から送り出された

第一問（後書き）

天使付きです

プロローグも終わり次回から本編に入ろうと思っています。

今日中に更新しようかな？

第一問（前書き）

プロローグ編は今度こそこれで最後にするつもりです

第一問

転生して3年くらいは大変だった

僕は体の本能を抑えられなかつた

寝たり、起きたり、おなかがすいたのを我慢したり、排泄のコントロールでさえできなかつた

仕方ないので天使とイメージで会話をすることで暇をつぶした
歩くことができると何とか自分のやりたいことができて
きた

双子の兄がいたので退屈はしなかつた

そして小学校に入り10歳になった時

父のパソコンを分解してみた

さすがはスクルドの技術たかが10年程度で錆びつくことはないようだ

すべてのパーツを磨き上げ元に戻した

父はなぜパソコンの性能が上がったのか首をひねっていた

それで味をしめた僕は自分の携帯電話を改造してみた

だがさすがにこれは両親に見つかってしまった

最初はびっくりしていたが僕が一回ぱらして元に戻してみると

「自分のやりたいことをやりなさい」

と言つて応援してくれた

中学に入学するといつ両親は家を建てた

その時無理を言つて地下室を作つてもらつた

そこに大手企業に技術を売り込んでできたお金で加工機械を置いた

そして高校は文翔学園に入学した

第一問（後書き）

文丘学園に入學するまでですね

誰と同じ学校にあるかは検討中です

第三問（前書き）

()の中が大貴が聞こえている話し相手が考えていることです

第二問

昨日のうちに腕輪の試作機は兄に渡しておいた。

で、僕はFクラスの前に立つていて

僕「覚悟はしていたけどまさかこじままでまさ・・・」

「？？？」通してくれないか

この声はまさかっ！！

僕「坂本雄一？」

雄一「なぜ俺の名前を知っている？」

原作知識は残つてますからね

僕「入学式で学園長を変態呼ばわりし、その後体育館にいた人間全員にケンカを売つたやつを忘れられるわけないだろ？元神童兼悪鬼羅刹君？」

雄一「そこまで知ってるのか。ところでお前は？」

僕「僕？田高大貴だけど・・・」

雄一「田高 大貴？お前まさか双子じゃないよな？（まさかこいつは！？）」

僕「ん？ 兄さんが2・Dにいるけど」

雄一「……とつあえず中に入つて話をう・・・（）につはラッキ
ー！！」

何をそんなに喜んでいるんだろう？

雄一side

よつしゃーーー！ これで俺の計画は成功率が高くなつた！！！

明久からの話で姫路がFクラスになつたのは知つていたがまさか高
得点所持者が増えるとは！

俺「日高・・・兄と間違えると厄介だから大貴と呼んでいいか？」

大貴「別にいいけど」

俺「お前は、この設備に不満はないか」

大貴「要するにみんなをたきつけてAクラスを倒し、学力がすべて
ではないと証明したいと？」

！！！

俺「何でそこまでー？」

大貴「わかつちやつたからわ」

俺「まあそういうことだ」

大貴「で、作戦は?」

俺「ちやんと考えてあるさ」

大貴「わかった待つていろよ。今日からやるんでしょ? 相手はロク
ラス」

!!!

俺「そうだけど」

大貴「作戦期待してるよ」

第三問（後書き）

誰か感想を！

感想がないとモチベーションが下がります。

第四問（前書き）

毎度お待たせしております

第四問

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で僕は少しだけ躊躇していた。

遅刻なんかしてきて、皆に悪い印象を持たれたりしないだろうか。

嫌なヤツや怖いヤツ、痛いヤツはいないだろうか。

今後一年間共に過ごす仲間がどういった人達なのか、不安でたまらない。

僕「なんて、考えすぎかな」

(たぶん) 大丈夫だろ？・・・

意を決して扉を開ける

僕「すいません、遅れちゃいました」

「？」 「早く座れ、このウジ虫野郎」

ドガツ メキッ ミシッ

「無しだつ！」

「？」 「う、うう」

目の前に人はいない

席(?)についているクラスの人たちは全員ある一点に目を集中している。

白田をむいて黒板にめり込んでいる坂本雄一に

バカ
坂本 雄一

雄一「よお明久」

目を覚ました雄一が左半身を黒板に埋もれさせながら挨拶をしてきた

片目しか見えないのが何ともシユールだ

明久「どうしたの? 雄一?」

雄一「いやウジ虫野郎って言つたからいつなつていた

僕にも訳が分からぬ

? ? ? 「えーと、ちよつと通してもうれますか?」

後ろから冴えないオジサン（おれりへ担任だらう）が話しかけてきた

「はい、わかりました」

僕は急いでそいつの席（？）に着く

先生は僕が席に着くのを待つてからゆっくつと口を開いた

「えー、おはよー」やこます。一年Fクラスの担任の福原慎です。
よひじくお願ひします。」

福原先生は黒板に名前を書いつとして驚いた。

半身が埋まつたクラス代表がそこにいたからだ

そしてこいつらに向くと

「皆さん全員に卓袱台ちゃふだいと座布団ざぶとんは支給されていますか？不備があれば申し出でください」

雄一「俺のことは無視かよーー！」

雄一の絶叫はどこかへ消えていった

50人程度の生徒が所狭しと座っている教室には机がない。あるのは畳と卓袱台に座布団だ

それも

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入っていないですー」

「あー、はい。我慢してください。」

「先生、俺の卓袱台の脚^{あし}が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、あとで自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました、ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

「先生、畳がかび臭いです」

「我慢してください」

「これは教室か？廃屋の間違いじゃないのか？」

体育倉庫のほうがいくらかましな気がするけど…

「必要なものは極力自分で調達するよ！」
「ひじょうださい」

不備しかないじゃないか。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

第四問（後書き）

次回は自己紹介timeです

第五問

大貴 side

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生がそう言つと女子のよつたな男子が立ち上がった。

去年同じクラスだった木下優子の弟、秀吉だ

「木下秀吉じや。演劇部に所属してある」

この言葉遣いが特徴的だ

確か次は、^{ムツヅリーニ}土屋康太だから準備しておくが

「・と、いうわけじや。今年一年よろしく頼むぞい」

それで

「・・・土屋康太」

取引先の一つだ。カメラ、盗聴器、PCなどのカスタム、データのバックアップなどをよく頼まれる

スクルドに教えてもらつた技術を「なんことに使うのは好ましくないのはわかつてゐるけど・・・

そして・・・

「島田美波です。」

要注意人物№〇・2

「海外育ちで、日本語の会話はできるけど読み書きは苦手です」

「もし「〇〇」であるを言つたならば・・・

「趣味は

言つた！

吉井明久を殴る」とです

「

明久Side

島田さんが

恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を暴露した直後

壁に叩きつけられて氣を失つた

いつたい誰がこんなことを…！

「……です。よろしく。」

誰も気にせず自己紹介を進めた

淡々と自分の名前を告げるだけの作業が進む

そして僕の番がやつてきた

一瞬考えて軽いジョークを織り交ぜて自己紹介をすることにした

「・「ホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

『『『ダアア――リイ――ン――』』』

うつ

のどに焼けるような痛みが・・・

何とか吐き気をこらえて

「・失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願ひいたします」

ふう、なんとか(?)なつたかな?

そしてまた単調な作業が続く

眠くなつてきたその時に

教室のドアが開かれた

第五問（後書き）

雄一と美波がなぜこうなったのか

次話以降で書きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6869x/>

バカと兄と召喚獣

2011年11月20日20時04分発行